

いじめを受けた時の自覚症状と 対処行動に関する研究

中桐佐智子 岡本陽子 澤田和子

Study on self awareness and reacting behavior in being bullied

Sachiko NAKAGIRI, Yoko OKAMOTO, Kazuko SAWADA

要 旨

大学生を対象に、小・中・高校時代において、いじめを見たり、いじめを受けたときの身体症状や対処行動について調査を行った。

いじめを見たときの対処行動は、いじめられている人を励ましたり、いじめている者を注意したり、先生に相談したりと関わっていた。何もしない傍観者と思われる行動をとった者は40%いた。

いじめられた経験者は38%いたが、女性と中学生に有意に多く認められており、様々な身体症状を表出していた。

いじめに気がついてくれた人は、友人が最も多く、次いで母親、担任、養護教諭であった。いじめの発見、気づき、辛さの緩和などに果たす母親の役割は重要であり、学校は母親と連携する対策を考慮する必要がある。

キーワード：いじめ、児童生徒、対処行動、身体症状、因子分析

Key words : bully, child student, reacting behavior, self awareness, factor analysis

はじめに

近年、いじめを受けた児童生徒が自殺をするという痛ましい事件が相次いで発生しており、「いじめはどここの学校でも、どの子でも起こりうる」と教育に携わる者全てが改めて認識し、いじめの早期発見、早期対応が求められている。2007年1月に文部科学省はいじめの定義の見直しを行い、「子供が一定の人間関係にある者から、心理的・物理的攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもので、いじめか否かの判断はいじめられた子供の立場に立って行うように徹底させる」¹⁾とした。

学校において養護教諭は保健室にやってくる子供の観察をすることにより、いじめに遭っている子供を早期発見し、早期に対応することのできる立場にある。今回大学生が過去にいじめに遭遇した時に

とった行動や身体症状を明らかにし、分析することにより、養護教諭としていじめの早期発見・早期対応の資料としたいと考えた。

研究目的

いじめの悪質化、長期化を是正するためには早期に発見し、被害者にいじめに対処する気持ちを持たせること、教師は周囲に有効な対処をとることが必要である。子供は一人一人プライドを持っており、強い防衛的心理を持っている。このため周囲の人々になかなか自分の弱さを表すことが難しい場合がある。養護教諭は担任と共に早期発見をするという役割を担っているが、過去の事例や実態調査等を参考に適切に観察し、いじめに気づいたり、相談にのる場面を作る必要がある。今回の調査では、大学生が

過去に経験したいじめに対する対処行動や身体症状の実態を把握する。

研究方法

1. 対象者

対象者は2大学及び1短期大学に在学する学生の中で、この研究に参加することを同意した312名である。

2. 調査期間：2007年4月～5月

3. 調査方法

調査に当たっては事前に本調査の趣旨を説明し、同意の得られた者について調査票を配布した。質問項目は、基本的属性、いじめられた経験と対処行動、いじめを見た経験と対処行動、いじめられた時の自覚症状・対処行動とした。分析方法はSPSSver14.0を使用し、カイ二乗検定及びT検定と、因子分析、一元配置分散分析及び多重比較を行い、有意水準は $p<0.05$ とした。

4. 倫理的配慮として以下の点に留意した。調査は無記名であり個人が特定されないこと、データは統計的に処理し個人情報に関しては秘密が厳守されること、調査の協力は自由意思によることを調査票に明記した。配布した調査票に記入し提出することをもって、研究協力の同意とみなした。

結 果

1. 回収状況

回収は328名（回収率93.7%）、その内訳は男性

72名、女性256名であった。平均年齢は 19.60 ± 2.375 であり、いじめの多発した²⁾平成7年頃に小学校から中学校に在籍していたことになる。

2. いじめ経験

いじめを見たことのある人は、表1に示すように238名（72.6%）、いじめられた経験のある人は、127名（38.7%）であった。このうちいじめられた経験のある者は、女性に多く有意差が認められた。

3. いじめを見たときの対処行動

いじめを目撃した238名にどんな行動をとったか回答して貰った。表2に示すように、いじめられている人に対して「励ました」のが最も多く51.3%であり、次いで37%の人が「いじめられている人を助け」ていた。いじめている人に「注意した」人も36.1%いた。「先生に相談」した者は26.9%、「母親に相談」した者は17%いた。何らかの対処行動をとったのは女性に多く、有意差が認められた。見ても何もしなかった者は全体で40%程いたが、男性は女性に比べて多い傾向があった。

いじめを見た学校は小学校と中学校がほぼ同数

表1 いじめ経験 n=328

		男	女	計	p
見た	数	49	189	238	n.s.
	(%)	(68.1)	(73.8)	(72.6)	
経験した	数	16	111	127	**
	(%)	(22.2)	(43.4)	(38.7)	

* $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

表2 いじめを見た時の対処行動（複数解答） n=238

項目	男 (%) n= 49	女 (%) n=189	計 (%) n= 238	p	
いじめられている人を助けた	10 (20.4)	80 (42.3)	90 (37.6)	**	
いじめられている人を励ました	16 (32.7)	106 (56.1)	122 (51.3)	*	
いじめている人に注意した	16 (32.7)	70 (37.0)	86 (36.1)		
相談した	母親	1 (2.0)	41 (21.7)	42 (17.6)	***
	父親	0 (0)	9 (4.8)	9 (3.8)	
	先生	5 (10.2)	59 (31.2)	64 (26.9)	*
	先生に手紙で相談した	0 (0)	4 (2.1)	4 (1.7)	
	カウンセラー	0 (0)	1 (0.5)	1 (0.4)	
	電話相談に相談した	0 (0)	9 (4.9)	9 (3.8)	
何もしなかった	24 (49.0)	71 (37.6)	95 (39.9)		

* $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

で66%であった。高等学校になると大幅に減少し18%になり、大学では1%まで下がっていた。

4. いじめを経験した学校

いじめを経験したと回答した127名が、いじめをうけた学校として回答した結果が表4である。いじめられた学校は中学校が最も多く(56.7%)、性別では女子に多くなっていた。次いで高等学校、小学校、大学の順で低くなっていた。この結果は文部科学省の実態調査結果と一致していた³⁾。

小学校でいじめを経験した32名中で17名は中学校でも経験し、5名は高校で、4名は大学でも経験していた。中学校でいじめを経験した72名の中で、20名は高等学校でも経験し、6名は大学でも経験していた。図1に示すように小学校や中学校でいじめ

表3 いじめを見た学校 (複数解答)

	男 (%) n= 49	女 (%) n=189	計 (%) n= 238
小学校	32 (65.3)	125 (66.1)	157 (66.0)
中学校	34 (69.4)	124 (65.6)	158 (66.4)
高等学校	11 (22.4)	33 (17.5)	44 (18.5)
大学	1 (2.0)	3 (1.6)	4 (1.7)

表4 いじめを経験した学校 (複数解答)

	男 (%) n= 16	女 (%) n=111	計 (%) n=127
小学校	6 (37.5)	26 (23.4)	32 (25.2)
中学校	6 (37.5)	66 (59.5)	72 (56.7)
高等学校	2 (12.5)	37 (33.3)	39 (30.7)
大学	0 (0)	9 (8.1)	9 (7.1)

られた人の中には、校種が変わってもいじめられる事が繰り返されていた。

5. いじめられたときの対処行動

いじめられた経験があると回答した127名がとった対処行動を表5に示した。「相手に逆らった者」48.8%が最も多く、次いで「母親に相談した」48.0%、「やめるように言った」者31.5%であった。

誰かに相談した者は70%を超えていたが、誰にも相談しなかった者が26%いた。相談した相手は、「母親」が最も多く、次いで友人、先生、父親である。電話相談やカウンセラーの設置など教育委員会がとっているいじめ対策処置は余り利用されてなかった。

性差では、男性は、「相手に逆らった」者が50.0%と最も多く、女性は「母親に相談」が50.5%と対処行動に差が認められた (p<0.05)。

校種別に見ると表6に示すごとく、「相手にやめ

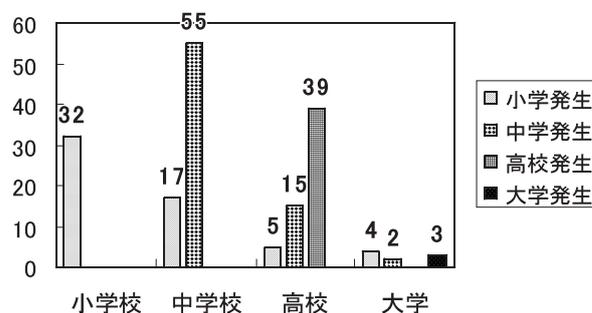


図1 いじめの発生と継続

表5 いじめられた時の対処行動・性別比較 (複数解答)

事項	男 n=16	女 n=111	計 n=127	p	
相手にやめるように言った	5 (31.3)	35 (31.5)	40 (31.5)		
相手に逆らった	8 (50.0)	44 (39.6)	62 (48.8)		
相談した	母親	56 (50.5)	61 (48.0)	*	
	父親	2 (12.5)	14 (12.6)	16 (12.6)	
	先生	6 (37.5)	28 (25.2)	30 (23.6)	
	友人	5 (31.3)	51 (45.9)	56 (44.1)	
	カウンセラー	0 (0)	6 (5.4)	6 (4.7)	
	先生に手紙で相談	0 (0)	6 (5.4)	6 (4.7)	
	電話相談した	0 (0)	3 (2.7)	3 (3.7)	
	誰にも相談しなかった	4 (25.0)	29 (26.1)	33 (26.0)	

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

表6 いじめられた時の対処行動・校種別比較（複数解答）

事項	小学校 n=32	中学校 n=72	高等学校 n=39	大学 n=9	
相手にやめるように言った	9(28.1)	23(31.9)	13(33.3)	5(55.6)	
相手に逆らった	13(40.6)	34(47.2)	20(51.3)	5(55.6)	
相談した	母親	19(59.4)	33(45.8)	17(43.6)	4(44.4)
	父親	5(15.6)	8(11.1)	3(7.7)	0(0)
	先生	8(25.0)	17(23.6)	6(15.4)	1(11.1)
	友人	13(40.6)	32(44.4)	19(48.7)	3(33.3)
	カウンセラー	1(3.1)	4(5.6)	3(7.7)	1(11.1)
	先生に手紙で相談	0(0)	2(2.8)	2(5.1)	0(0)
	電話相談した	1(3.1)	1(1.4)	3(7.7)	1(11.1)
誰にも相談しなかった	10(31.3)	19(26.4)	12(30.8)	1(11.1)	

るように言った」「相手に逆らった」は小く中く高と校種の上昇に従って高くなる傾向があった。相談する相手は、母親或いは先生は校種があがるにつれて低くなる傾向があった。相談相手の友人は校種に関係なく母親に次いで多くなっていた。

6. いじめられた時の症状や行動

いじめられて、辛かった時に感じた症状や行動に関する質問項目は福田⁴⁾を参考に、筆者が保健室で観察した項目を追加して45項目作成した。評定は「4点:多くあった」「3点:少しあった」「2点:あまりなかった」「1点:全くなかった」の4段階評定で求めた。得点が高いほど症状や行動が多くあるように設定した。その結果平均点が3以上の項目はなかったが、「だるいと思う2.9点」が最も高く、「やる気がない2.8点」「意欲がない2.6点」と続いており、気持ちが萎えていることが推察された。次いで「腹痛があった」「頭痛があった」などの身体症状を比較的高率に自覚していた。

表7 いじめられた時の症状（頻度の多い項目）

順位	上位項目	平均点±SD
1	2. だるいと思う	2.90 ± 1.036
2	20.やる気がない	2.80 ± 1.051
3	21.意欲がない	2.65 ± 1.079
4	9.腹痛があった	2.57 ± 1.165
5	26.無言になる	2.54 ± 1.118
6	8.頭痛があった	2.52 ± 1.161
7	28.集中力がない	2.48 ± 1.053
8	18.ぼんやりする	2.40 ± 1.107
9	23.表情が乏しい	2.31 ± 1.089
10	27.落ちつかない	2.09 ± 1.109

7. 因子分析

分析法は主因子法とし、回転法はバリマックス回転を行い、回転後の固有値が1以上となる因子数とした。その結果8因子が抽出されたが、十分な負荷量を示さなかった3項目をはずし、再度主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。バリマックス回転の最終的な因子パターンを表8に示した。累積寄与率は66.0%、KMOの標本妥当性の測度は0.813で高く、尺度としては妥当性、信頼性があると考えられた。内的整合性を検討するために各因子のCronbach α 係数を算出したところ、第1因子0.913、第2因子0.889、第3因子0.791、第4因子0.743、第5因子0.745、第6因子0.852、第7因子0.712、第8因子0.799と十分な値が得られた。

抽出された第1因子はやる気がない、ふさぎ込んだ、意欲がない等の12項目で構成され「意欲減退」と命名した。第2因子は授業が始まっても遊んでいる、しゃべっている、席に着かない等5項目で構成され「授業妨害」と命名した。第3因子は吐く、腹痛、下痢等6項目であり「胃腸症状」、第4因子は急に目が見えなくなる、異常に水を飲む等5項目で「言動異常」、第5因子は首を振る、目をパチパチする等4項目で「チック症状」、第6因子は息が苦しい、胸が苦しいの3項目で「胸部苦悶」、第7因子は目が回る、立ちくらみの2項目で「めまい」、第8因子は薬物を乱用した、シンナーを使用したの2項目で「薬物依存」と命名した。

表8 いじめられたときの自覚症状・因子分析（主因子法、バリマックス回転法）

KMO 0.813	因子								命名
	1	2	3	4	5	6	7	8	
20. やる気がない	.800	.086	.189	.040	.145	.113	-.012	-.008	第1因子 意欲減退
19. ふさぎこんだ	.778	.063	.133	.116	.087	.209	.107	-.051	
21. 意欲がない	.732	.082	.122	.069	.215	.046	-.061	.002	
18. ぼんやりする	.700	.041	.121	.085	.047	.036	.333	-.118	
23. 表情が乏しい	.688	.095	.184	.095	.096	.202	.190	.164	
26. 無言になる	.638	.146	.074	.105	.174	.130	-.048	.157	
2. だるいと思う	.590	.169	.269	.147	.063	-.011	.210	.054	
17. 深呼吸がでる	.590	-.018	.031	.175	-.104	.218	.297	-.005	
28. 集中力がない	.541	.184	.093	.088	.268	.263	.158	-.067	
27. 落ちつかない	.482	.109	.094	.084	.367	.347	-.042	-.023	
22. 急に成績が低下した	.470	.038	.266	.317	.177	-.087	-.093	-.153	
8. 頭痛があった	.451	.020	.369	.063	.116	.166	.396	-.071	
39. 授業が始まっても遊んでいる	.104	.873	-.002	.027	-.007	.098	-.063	-.023	第2因子 授業妨害
38. 授業が始まってもしゃべる	.100	.861	.137	.014	.030	.046	.034	-.053	
37. 授業が始まっても席に着かない	.122	.813	.015	.004	-.071	.047	.062	-.026	
40. 掃除はまじめに取り組まない	.019	.667	.103	.014	.110	-.014	-.128	.033	
36. 教師に反発する	.116	.599	.098	-.071	.041	-.003	.151	.017	
15. 吐く	.183	.077	.698	.162	.012	.118	.026	.070	第3因子 胃腸症状
6. 急に太り始めた	.188	.155	.622	.028	.199	.064	.028	.072	
9. 腹痛があった	.289	.189	.535	.092	.137	.203	.209	-.021	
1. 発熱が続く	.101	.117	.505	.154	.076	.047	.402	.083	
16. 下痢がある	.117	.008	.492	.067	.069	.259	-.004	-.080	
14. 吐き気がある	.311	.122	.416	.157	.122	.343	.071	.088	
4. 急に目が見えなくなる	.177	-.117	.039	.601	-.004	.022	.177	.047	第4因子 言動異常
7. 異常に水を飲む	.108	.024	.333	.571	.202	.039	.170	-.018	
29. おかしな声を何回も出す	.099	.108	.031	.554	.444	.235	-.055	.205	
25. 幼い子の言葉使い	.060	.097	.087	.477	.121	.153	.168	.064	
24. 独言をいう	.173	.009	-.030	.346	.674	.087	-.080	-.020	第5因子 チック症状
31. 首をふる	.253	.057	.088	-.092	.625	.020	.062	.211	
32. 目をパチパチする	.077	.084	.161	.215	.617	.029	.110	-.019	
33. 手を洗うことが異常に多い	.172	-.118	.246	.080	.526	.109	.091	.022	
10. 息が苦しい	.280	.013	.300	.155	.082	.802	.102	.060	第6因子 胸部苦悶
11. 胸が苦しい	.384	.104	.231	.161	.094	.684	.214	.051	
13. 心臓がどきどきする	.376	.095	.294	.164	.209	.521	.213	-.028	
3. 目が回る	.326	-.123	.086	.347	.122	.231	.729	.133	第7因子 めまい
5. 立ちくらみ	.335	.102	.173	.246	.033	.220	.467	-.018	
35. 薬物を乱用した	.006	.020	.029	.076	.053	.069	-.024	.897	第8因子 薬物依存
34. シナ-を使用した	-.014	-.069	.041	.206	.066	-.027	.082	.762	
固有値	11.4	3.51	2.62	2.08	1.82	1.65	1.37	1.21	
累積負荷量	29.3	38.3	45.0	50.4	55.1	59.3	62.8	66.0	
α 係数	.913	.889	.791	.743	.745	.852	.712	.799	

8. 因子構造と基本属性の関連

第1因子「意欲減退」は、全体的に平均値が高くなっており、中学校と大学に有意差が認められ、特

に中学生はやる気がなくなると答えていた。第2因子「授業妨害」は中学校が多くなっていて。第3因子「胃腸症状」は女性に腹痛が多くなっていて。校

表9 いじめの因子構造と基本的属性の比較

		n	第1因子 意欲減退 平均値	第2因子 授業妨害 平均値	第3因子 胃腸症状 平均値	第4因子 言動異常 平均値	第5因子 チック 平均値	第6因子 胸内苦悶 平均値	第7因子 めまい 平均値	第8因子 薬物依存 平均値	
性別	男性	16	2.05	1.54	1.45)*	1.14	1.46	1.70	1.37)*	1.03	
	女性	111	2.37	1.52	1.83)	1.19	1.36	2.06	1.80)	1.00	
校種	小	有	32	2.51	1.40	1.69	1.24	1.51	2.12	1.89	1.00
		無	94	2.27	1.57	1.82	1.16	1.33	1.98	1.75	1.01
	中	有	72	2.53)***	1.68)**	1.91)*	1.25)*	1.42	2.24)**	1.90)*	1.01
		無	55	2.08)	1.32)	1.62)	1.10)	1.31	1.73)	1.55)	1.00
	高	有	39	2.52	1.51	1.93	1.22	1.45	2.43)**	1.96	1.01
		無	88	2.25	1.54	1.72	1.17	1.34	1.84)	1.65	1.01
大	有	9	2.92)*	1.40	2.42)**	1.51	1.83)**	2.70)*	2.38)*	1.00	
	無	118	2.29)	1.54	1.74)	1.16	1.34)	1.97)	1.70)	1.01	

*p<0.05,**p<0.01,***p<0.001

種別には中学校と大学が多くなっていた。第4因子「言動異常」は中学校が多くなっており、奇声を発するなどの項目が高くなっていた。第5因子チック症状は大学生に有意に高率に認められた。第6因子「胸部苦悶」は中学、高校、大学で有意に高かった。第7因子「めまい」は女性と中学生、大学生にいじめを受けたときに高率に自覚されていた。第8因子「薬物依存」は平均値は最も低くなり、有意差も認められなかった。

表10 いじめに気がついた人（複数解答）

	男 (%) n= 16	女 (%) n=111	計 (%) n=127
母	5(31.2)	37(33.3)	42(33.1)
父	1(6.3)	8(7.2)	9(7.1)
担任	2(12.5)	9(8.1)	11(8.7)
養護教諭	1(6.3)	8(7.2)	9(7.1)
友人	3(18.8)	42(37.8)	45(35.4)
その他	2(12.5)	10(9.0)	12(9.4)

9. いじめに遭っていることに気がついた人

いじめを受けていることに気がついてくれた人についての結果を表10に示した。友人(35.4%)が最も多く、次いで母親(33.1%)が挙げられていた。多くの症状をサインとして出しているにも関わらず、殆ど気づいて貰ってないことが分かった。特に先生(8.7%)、養護教諭(7.1%)は比較的低率となっていた。37名(28.9%)は気がついてくれた人はいなかったと回答していた。

母親が気づいてくれた者の21%が苦痛がとても消えたと思っており、50%が少し緩和されたと思っており、母が気づいてくれなかった者との間に有意差が認められた(p<0.05)。しかし先生や養護教諭、友人などが気づいた者に関しては、気づいてくれなかった者との間に、有意差は認められなかった。

考 察

最近「子供達の世界で何かが変わり始めた」とい

う声を耳にするようになった。たかが子供達の間での喧嘩や悪ふざけとして見過ごされてきたいじめが、自殺者を出すことにより、いじめが社会問題として見直されてきた。この調査では、72%の者がいじめを見た経験を持ち、38%の者がいじめられた経験を持っていた。最近の他の調査でも似通った数値が示されており^{5)~7)}、いじめ現象が子供達の間広がっていることを示している。

いじめを見た時の子供の関わり方は、「いじめられている人を励ました」が51%と最も多かった。「いじめられている人を助けた」「いじている人を注意した」「先生に相談した」が、これに次ぐが、いずれも男性に比べて女性が多かった。何もしなかった傍観者と思われる人が40%に認められ、お互いを思いやる心のはぐくみと、いじめは絶対に許されないという観点からの学級指導が必要だと考えられた。

いじめられた時の対処行動として、性別から見ると「相手にやめるようにいった」が男女の差がなく3割、「相手に逆らった」が男性5割、女性が3割いた。

相談した相手は、最も多いのは「母親」であり、女性は5割、男性3割で性差が認められた ($p<0.05$)。次いで「友人」「先生」の順であるが、誰にも相談しなかった人も3割いた。

校種別に見ると「やめるように言った」「逆らった」行動は中学校、高校、大学と校種の上昇に従って高くなっていく傾向がある。一方「母親」「先生」に相談する行動は、中学校、高等学校と減少する傾向を示した。「友人」に対する相談や、「誰にも相談しない」行動は校種差がない。教育委員会がいじめ対策として設置した「カウンセラー」や「電話相談」は余り利用されていなかった。またいじめられた体験は、小・中・高と校種が違っても継続している人が居ることが分かった。小学校、中学校と同じような級友と過ごす子どもも多いことを考えて、先生や養護教諭はいじめを受けた子ども情報を引き継いでいくことが必要だと考えられた。

いじめられた時の身体症状として4段階評価を求めたが、3点以上となる高得点項目はなく、最高でも2.9点の「だるいと思う」であり、人によって様々な症状が自覚されていることが分かった。因子分析したところ8因子が抽出されたが、性差が認められたのは「第3因子・胃腸症状」と「第7因子・めまい」であった。女性はふさぎ込んだり、腹痛があったり、胸が苦しい等男性に比較して訴えが多かった。校種でも症状に差があり、小学校では有意差がなかったが、中学校ではふさぎ込んだり、授業が始まってもしゃべる等の授業妨害行動が多くあり、いじめを受けて表出する行動が多種多様であることが理解された。中学生にいじめ問題がより重要であることは濱口等^{8),9)}の指摘と一致する。高校になると息が苦しかったり、心臓がどきどきする等の「第6因子・胸内苦悶」症状が増えていた。大学生はいじめの経験は9人と少なかったが、意欲減退や胃腸症状、チック症状、胸内苦悶など訴えが多くなっていた。

いじめに遭っていることに気がついた人として、友人を35%、母親を33%と挙げていた。特に母親が気づいてくれた人の70%が症状の緩和を感じていた。これに比して、担任や養護教諭の果たしている役割は余り大きくなかった。又いじめを誰も気づ

いてくれなかった人が30%おり、誰にも相談しなかった人と一致し、一人苦悩している姿が想像される。

文部科学省では多くの子供達が悩みを抱えている現状を踏まえ、平成18年12月にいじめ問題などに対する喫緊の提案を行っている¹⁰⁾。一部抜粋すると、「子供が様々な大人に相談できる場面を作りましょう」として、いくつかの提案をしている。具体的には、「学校では教員や養護教諭などがしっかりと子供達と接しながら子供達の間関係の在り方全体を改善しなければ成りません。その上で小学校では子供と親の相談員、中学校ではスクールカウンセラーが子供からの相談について、専門家としての役割を果たしていくことが重要です」と提案し、続いて電話相談は「子供人権110番」や警察署、児童相談所などが行っていると具体的に対策を打ち出している。このことから養護教諭は保健室で子供の訴えている症状がいじめから来てはいないかということも念頭において、話を聞く態度が必要であろう。

結 論

大学生が過去に経験したいじめに対して、とった行動や自覚症状について調査し、分析した。

1. いじめを見たことのある人は238人(72%)、いじめられたことのある人は127人(38%)いた。いじめられた経験は女性に多くあり、同一人に対して、校種が変わってもいじめが続いている事が分かった。
2. 校種別では中学校が最もいじめられた経験が多くなり、次いで高校、小学校となっていた。中学生は、意欲が減退したり、授業妨害、身体症状等の様々な対処行動が表出されており、いじめ対策が中学校で最も必要であることが示唆された。
3. いじめを受けたときの行動や症状としては、ぼんやりしたり、頭痛腹痛、胸内苦悶症状などの訴えで学校を休んだり、教室で騒いで授業妨害行動に出たり、薬物使用行動に出たりと多種多様であった。担任や養護教諭はいじめられているというサインに気づき、相談にのり、対策をとることが重要である。

4. いじめを受けていることを誰も気付いてくれなかった人は28%、誰にも相談しなかった人も26%いた。一人で悩み苦しんでいる子どもを救済するために、電話相談やスクールカウンセラーの情報を積極的に提供する必要がある。
5. 母親はいじめの相談に乗ったり、気がついて辛い気持ちを緩和する役目を担って居ることがわかった。従って今後のいじめ対策を進めていく上で、母親との連携協力を推進する必要がある。

Abstract

Survey on the experience of witnessing bully or of being bullied was conducted with university student as a study sample: Reacting behavior in witnessing bully included encouraging those who were bullied, telling bullying side to stop it, or consulting to the school instructors, whereas 40% of those who witnessed bully was just looking, doing nothing.

Among 38% of those who experienced being bullied, significantly more women and more junior high school students were being bullied. Those who were bullied have expressed various physical symptoms as reaction.

Those who found bully incident were mostly mothers, followed by a class teacher, and a school nurse teacher. Role of a mother in finding bully incident, realizing it, and alleviating pains out of bully means so important, so that schools need to consider ways to develop good network with mothers of the students.

引用文献

- 1) いじめ問題に関する事例集：文部科学省 国立教育政策研究所生徒指導研究センター、平成19年2月
- 2) 児童生徒の問題行動に関する調査研究協力会議 答申；生徒指導上の諸問題の現状について、文部科学省、200年12月
- 3) 児童生徒いじめ等に関するアンケート調査結果：児童生徒の問題行動に関する調査協力者会議、1996年5月
- 4) 福田俊一、増井昌美（2005）事例で学ぶ「しぐさ」は子どもの心を写す鏡です、健康な子ども、34（6）、9-18
- 5) 森田洋司（1991）：最近のいじめの様相と対策－私事化社会における「現在型」問題行動、ジェリリスト、976、35-41、
- 6) 森田洋司（1985）：学級集団における「いじめ」の構造、ジェリリスト、836、29-35
- 7) 春日作太郎；いじめられ経験・いじめられた経験と問題行動傾向および性格の関連性の検討、第5巻、97-102、盛岡大学短期大学紀要
- 8) 濱口佳和、三浦香苗、清水幹夫他（1998）；いじめに対する子どもの対処行動に関する研究、第5巻、23-34、千葉大学教育実践研究
- 9) 滝充（1986）中学生の「問題行動」に関する研究－いじめの問題を中心に－、第60号、61-74、宮崎大学教育学部紀要 社会科学
- 10) いじめ問題等に対する緊喫の提案について；文部科学省 子どもを守り育てるための体制づくりのための有職者会議、平成18年12月